

留学を終えて

岐阜高等学校 加藤 あかね（フィンランド）

私が留学したフィンランドのオウルは北部の人口約 21 万人の都市です。滞在した家はオウル川と森の近くで自然に囲まれていました。毎日森の道をバス停まで歩いたり、森を散歩したりしました。森の空気や自然の音がたくさん感じられ、平和で落ち着いたところでした。雪国ならではの美しい銀世界と寒さ、短い夏の植物の生命力と美しい水、神秘的なオーロラなど 1 年で大きく変化する自然の中で生きる力を感じることができます。フィンランドでは趣味を持つ人が多く、仕事や家庭と同じくらい趣味も大切にして、ゆったりとした時間が流れている国でした。このレポートでは私が留学を通して感じたフィンランドの学校のこと、言語のこと、文化交流のこと、友達との交流で気づいたことについて書こうと思います。

私は 2023 年 8 月 29 日に、フィンランドに出発しました。フィンランドの長期滞在に必要なビザが出発予定前に発行されず、予定より 23 日遅れた出発でした。出発を待つ間、ホストマザーにビデオ通話でフィンランド語の文法などを教えてもらいました。

フィンランドの学校は 8 月上旬に始まるため、到着した翌日から登校しました。私が通った高校 Kastellin lukio は大きな学校で、普通科とスポーツ科があり、施設が充実しています。フィンランドの高校では、自分の将来の方向性により科目を選びます。日本にある教科以外に心理学、哲学、宗教も学べます。私は心理学に興味があり 4 つのコースを取りました。勉強していくうちにさらに興味を持ち、日本に帰国して心理学の本を借りて読んでいます。1 年は 5 学期に分かれていて、1 学期には最高で 8 科目選択可能で、たいてい 5 ～ 7 科目とるので空きコマができ、友達と過ごしたり宿題をしたりします。また、学年制ではないので様々な年齢の子と授業を受けます。部活はありませんが、私の学校には選択授業の中で科学の大会に参加するチームや休み時間に活動するクラブなどがありました。私は手芸クラブに参加し、編み物や折り紙を楽しみました。寒い冬に毛糸のマフラーや手袋、帽子は必須で、冬に向け編み物をする人が多いです。私も編み物の面白さに気づき帽子やミトンなど編み始めました。リラックスできる趣味で、近隣の人と編み物の話で盛り上がったこともあります。また、フィンランドの高校では一人一台パソコンが配られ、画面上の教科書を見ながら日々の授業を受け、提出課題をやります。当初はパソコンの操作、特に数学の計算ソフトの使い方に戸惑いました。デジタル教科書は簡単にマーカーやメモを書けたり、教科書内検索で情報を探しやすい反面、目が疲れたり、集中が続かなかったりして、紙に書く方が覚えやすいと感じるときもありました。しかし、先生にメールを送ることができ、自分の時間割をパソコン上で確認できるのは便利で、自分で管理する力がつくと思いました。

留学中言語習得を目指す中で、その国の言語を学ぶ意味を考えることができました。初めの頃はフィンランド語を何も話せず、ほぼ理解もできない状況で、教科書やノートを日本語に訳してやっと授業の内容を理解する、といった具合で、とても大変でした。言語は国の文化や習慣を表していて、言語を学ぶことは国を理解するために大切だと思ったので、授業をよく聞いたり、家でさらに文法を教えてもらったり、積極的にフィンランド語を話したり、

本や雑誌を読んだりしました。3か月たった頃、少し授業が分かるようになって、フィンランド語で先生に話しかけてみました。私がフィンランド語を話すと先生たちは驚き、喜んでくれて、私にもわかるよう簡単な言葉で話してくれたので、言語学習がさらに楽しくなりました。4か月目にホストマザーの家族に会いましたが、彼らは英語を少し話せるだけだったのでフィンランド語で話してみました。自分の知識と想像力を総動員して話したら、想像以上に会話が成り立ち、自分のフィンランド語に自信を持つと同時に、さらに様々なことを伝えたいと思い始めました。6か月頃から翻訳機がなくても授業を理解できるようになり、さらに勉強が楽しくなりました。先生やファミリー、クラスメイトともフィンランド語で話すようにしました。やはり英語が通じるとは言っても、フィンランド人にとって英語は母国語ではないので、英語に自信がなく英語だと話しかけられないけれどフィンランド語なら話したい人もいて、フィンランド語で話すことで、お互いをより親しく感じられました。その国の言葉で話すことの大切さを実感しました。

一番難しかったのは話す勇気を出すことでした。私の周りはフィンランド語のネイティブばかりで、私のようにたどたどしいフィンランド語を話す人はいません。どんどん進んでいく会話を理解できても会話には入れませんでした。話す前にどう言うか考えている間に話題は過ぎていくし、私はフィンランド語の強いrを発音できず、理解されないのではと怖がっていました。けれども、私のつたないフィンランド語を理解してほめてくれる友達や先生、ファミリーのおかげで、身振り手振りや表情、相槌を交えてフィンランド語で伝えようと思いました。

フィンランドでは英語を使える人が多く、留学してもフィンランド語を習得せず帰国することもあるのは本当だと感じました。印象的だったのは近所の人やクラスメイトがすぐ英語で話しかけてきたことです。フィンランド人が英語を話せるのは英語の使用頻度や必要性が高いからではないかと思いました。テレビではたくさん英語の番組や映画が放送されます。フィンランドでは子供向けの番組以外、海外のものは吹き替えせず字幕を付けるだけです。学校の授業でビデオを見る時もフィンランド語だけでなく、英語で説明されているものも多く見ます。日々言語を使う力が鍛えられていると感じました。

高校の交換留学は文化交流であり、両国の人にお互いの国に興味をもってもらうことに意義があると思っています。私は日本の高校に毎月、フィンランドで体験した日常生活や行事などについて書いたレポートを送っていました。ある時日本の家族から、私がフィンランドに留学に行ってから、テレビやラジオを流していても、フィンランドという言葉が聞こえるとはっとその番組に耳を傾けるようになったという話を聞きました。自分のレポートがただ事実を伝えるだけではなく、留学生の私の存在や留学中に発信する情報により、今まで気にしなかったフィンランドという国の情報を自然に取り込んだり、身近に感じてもっと知りたいと思ったり、視野を広げたりするのに役立っていると感じました。

この留学を通してかけがえのない親友に出会いました。全く違う文化の中で育った人同士が、打ち解けあえることに感動しました。学校では、留学の初めから温かく受け入れられましたが、孤独で部外者だと感じていました。だから自分から授業の時などに声をかけて自

分の存在を知ってもらい、会話をするようにしました。また、留学担当の先生が女の子を紹介してくれて、その子と一緒に過ごして色々教えてもらいました。その子の友達も私を受け入れてくれて、友達の輪が広がりました。友達と休み時間や放課後に時間を忘れるほどたくさん話し、時にはフィンランドと日本の選挙や学校、自然のことなどお互いの文化の違いを実感しました。そこで日本の生活で大切な基盤となる考え方の中には、日本特有で世界共通ではないものもあると気づきました。文化の違いは住んでいる人々の価値観や考え方に基づいていて、それぞれの国の習慣を知り、価値観を理解して受け止めることが重要だと感じました。この視点は今後生きていくうえで何を理解するにも必要だと思うので大切にしていきたいです。また、自分に根付いている文化を人に説明する難しさと面白さを感じ、自分の知識を増やしてもっと日本について伝えたいと思いました。多くの友達が日本に興味を持って質問してくれたり、一緒に日本食を作ったり、日本そして私の住んでいる岐阜について調べてくれて幸せでした。留学前は、友達に自分のことを話せませんでした。フィンランドでは友達に自分から話すことも増えました。そして帰国して、出発前より自分に自信が持てたと感じています。自分の思うことを人に伝えられるようになり、目指していたことを達成できました。フィンランドの友達と一緒に勉強して高校を卒業したかったのですが、それはできません。お互いが離れてもフィンランドで過ごした思い出はずっと私の中に残っています。友達は国を超えた人と人のつながりであると強く感じました。いつか再会を果たすため、まず高校を卒業して自分の進む道を見定めようというモチベーションが湧きました。

高校留学ではホームステイでその国の生活や文化に入り込み、現地の生徒たちと同じ高校生活を送ります。彼らがどのような価値観や考え方の中で生きているのかを知り、外からは感じられない住人しかわからない習慣や感性に気づき、そこで生活する中でその国の一員のように感じるができます。未知の国で言語を学びながら高校に通った経験は、自分に対する理解を深め、自身の世界を大きく広げたと思います。初めての言語で初めて学ぶ分野に取り組んだことは、勉強することの楽しさと挑戦することの面白さを教えてくれました。この気持ちを忘れず、これからも興味の幅を増やしていきたいです。また、多くの人と出会う中で、自分は一人ではなく、周りからたくさん支えられていることを実感しました。留学を支えてくれた家族、高校、友達、ファミリー、岐阜県の方々、関わって頂いた全ての皆様、ありがとうございました。



